

特別活動における三つの視点を踏まえた 協働的な学びの方法

—A 中等教育学校での実践事例から—

東京都高等学校特別活動研究会

会長 藤野 泰 郎

1 実践報告校について

A 中等教育学校は、都立高校改革推進計画に基づき平成 22 年に誕生した中高一貫教育校である。前身の都立 A 高等学校の伝統を引き継ぎつつ、「思いやり・人間愛をもった社会的リーダーの育成」を基本理念として様々な教育活動を精力的に行っている。

勉学とともに特別活動に力を入れており、様々な体験活動や学校行事などを含む 6 年間の中高一貫教育を通して、思いやりをもった人間性を涵養するとともに、体系化された 6 年間の探究学習によって複雑で変化の激しい社会に必要な課題解決能力を育成している。上級生が下級生の面倒を見るといった家族的な雰囲気を用意的に醸し出し、下級生が上級生の姿に憧れをもって学習や学校行事・部活動に励むとともに、高度な進路目標の実現を目指して、充実した学校生活を送っている。

2 本実践の位置付け

本実践報告では、特別活動における三つの視点を踏まえながら「生活指導部としての行事運営とコロナ対応」と「教務部としてのカリキュラムマネジメント」について述べる。

3 生活指導部での行事運営とコロナ対応

(1) 各行事に向かう生徒の現状

学習指導要領 高等学校 特別活動編において、特別活動で育成することを目指す資質・能力は「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点に整理され、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事を通じて育成する資質・能力を定めている。

東京都教育研究員の特別活動部会で実践研究を行っていた際、生徒対象に行った現状把握調査（アンケート方式）からも、話し合い活動の有効・効果的なものとして認識している一方、自分の意見を言ったり、異なる意見に対し、疑問点を提示したりするなどといった、話し合い活動を深めるような議論をしていないことや、主体的に話し合いに参加していない人がいることが分かった（表 1 の四角囲み）。課題解決や人間関係形成のための合意形成の経験が乏しく、意思決定や合意形成の意義や有用性が見い出せない生徒が多い（人間関係形成への課題）。また多様な場面で、自分と異なる考えや立場にある多様な他者を尊重し、認め合いながら支え合ったり補ったりして協働していくことが苦手な生徒が多い（社会参画への課題）。そして身に付けたことを生かすことができず、達成感や自己有用感を得ることが少ないため、主体的に新たな課題に向かうことがで

きない生徒が多い（自己実現への課題）。

話し合い活動が効果的に行われたい現状を考えると、教員による効果的な働きかけが必要であり、生徒の状況を確認しながら適切な指導を行うことで、深い話し合い活動を促すことができるのではないか、と考えた。話し合い活動を生徒任せにせず、生徒が円滑に話し合い活動や行事を進めることができるよう、教員が事前に「ねらい」を明確に示し、「意図的・計画的」に特別活動を行っていく必要がある。

質問項目	当てはまる	どちらかといえ ば当てはまる	どちらかといえ ば当てはまらない	当てはまらない
①物事を決める際に、話し合いは役に立つと思いますか。	47.3%	48.4%	4.3%	0%
②クラスで物事を決める際に、話し合い活動をしていますか。	37.9%	43.1%	15.8%	3.2%
③物事を決める際に、自分の意見を言えていますか。	20.2%	40.4%	27.0%	12.4%
④物事を決める際に、すぐに多数決をとることが多いですか。	35.1%	30.9%	21.3%	12.8%
⑤話し合いで相手の意見の類似点や相違点を理解することができますか。	31.5%	56.5%	9.8%	2.2%
⑥提案された意見に対して、疑問点を質問したり、反対意見を述べたりすることができますか。	21.5%	42.0%	24.7%	11.8%
⑧HRの課題を話し合い活動で解決したことはありますか。	18.4%	13.2%	32.9%	35.5%

n=155

表1 現状把握アンケート（抜粋）
（東京都研究員の特別活動部会で生徒対象に行った現状把握）

ホームルーム活動において育成することを目指す資質・能力は、①問題の発見・確認（生徒会活動は「問題の発見・確認、議題の設定」、②解決方法の話し合い、③解決方法の決定、④決めたことの実践、⑤振り返りという学習過程の中で育まれる。生徒が主体的にホームルーム（学級）活動や生徒会活動に取り組むために、教員が自治的なホームルームや学校の生活づくりを実感できるような一連の活動の中で、時機を捉えて的確にサポートし、意識して指導に当たることが大切である。

しかし高等学校における特別活動の場合、生徒の主体性や自主性を育成するという名目で、生徒が放任されたり、生徒に対して教員が不十分なかかわり方になったりするなかで、②解決方法の話し合いや③解決方法の決定が、個人の意思決定及び集団の意思決定が明確になされないまま、解決方法が決定され、その後の学習過程に大きな影響を与えてしまうことが多い。また、小・中学校時代にリーダー的役割を果たしてきた生徒や、自らの意見を積極的に話す生徒が多い場合は、話し合い活動が効果的になされることが多く見られるが、このような体験・経験が乏しく、自己肯定感が低い生徒が多い場合は、どのように話し合い活動を展開していけばよいか分からず、効果的な話し合い活動がなされないまま課題解決に向けた取組が上手くいかない場面が多く見受けられる。そして課題に対して、一人一人が自分なりの意見を持ち、合意形成に向けた話し合いをする前にクラスの中で発言力のある生徒の意見が先行し、安易に多数決で結論付けられてしまう。その後の活動の中で齟齬が生じ、軌道修正しようにも収拾がつかず、課題解決に至らないことが多く見受けられる。

このような状態に陥らないようにするためにも、ホームルームや学校の生活を向上させるための課題を「自分事」として捉え、個々の意思決定や集団での合意形成を図るために、教員が意図

的・計画的に、課題解決に向けた話し合いの目的を「明確化」し、目的に沿った話し合い活動を展開することが重要である。教員は適宜、話し合い活動について、到達目標を達成することができる進行や発言ができたか、状況把握を行う。生徒は「小さな振り返り」を行い、課題解決に向けた軌道修正や意見集約などを行うのである。

(2) 実践したこと

放送委員会の顧問として、学校紹介ビデオの制作という課題を与えた。制作過程において、学校PR動画撮影案の問題点（課題）に着眼した話し合いを行うことで、よりよい撮影案を作成し、委員会内での組織貢献力や自己有用感を高めることを目標とした。また委員会活動の活性化のため、中等教育学校の特性を生かし、1学年から5学年までの異年齢間での話し合い活動を取り入れた。通常の委員会時よりも緊張感を持ちながら積極的に意見を出し合い、委員会内でのよりよい合意形成や意思決定につながった。また、上級生がファシリテーターとして進行することで、議論がスムーズに進み、下級生も自分の考えを積極的に表明できるようになり、「よりよい人間関係を形成すること」にもつながった。

さらに、委員会活動の前には必ず、進行役の生徒と打ち合わせを行った。その際、資料「事前打ち合わせシート」（図1）を活用して進行スケジュールを相談した。その結果、進行役の生徒（本時の場合は放送委員長・副委員長）に自覚が芽生え、当日の進行もスムーズに行われるようになった。

図1 事前打ち合わせシート
(委員会活動の前に進行役の生徒と打ち合わせのために使用するシート)

放送委員会 事前打ち合わせシート		
今日の目標	話し合いを行い、撮影案を出し合う	
日時	11/20(水) 15:35~16:00	
司会	●(5A)・●(5B)	
進行スケジュール		
時間	内容	注意事項/Memo
15:35	★A組男子・A組女子・B組男子……の順に学年縦割りのグループを8つ作る(グループの進行役は5年、記録は1年)	
15:40	★8グループの担当を決める ・オープニング × 1グループ ・授業編 × 2グループ ・学校行事編 × 2グループ ・部活動編 × 2グループ ・エンディング × 1グループ	月10分Pct 終了
15:45	★必要な動画素材を列挙し、取捨選択の上、スクールタクトにまとめる	期末宿題スタート
15:55	★今後の撮影計画について	期首は苦難がある
委員会を終えて		
自己評価	*スムーズな進行ができた ⑤・4・3・2・1 *活発に議論ができた 5・④・3・2・1 *結論が出せた 5・④・3・2・1	
反省・感想 引継ぎなど	時間と学年が合えば、5年の進行役がからむまで話し	

この取り組みは合唱祭担当としても同様である。合唱祭が三大行事の一つに位置付けられ、6学年が一堂に会し、日頃の練習の成果を競い合う姿は圧巻である。しかし、多くの学校でみられるように「男子が協力してくれない」「練習よりも部活動に行きたい」といった不満を述べる生徒がいたのも事実である。そこで、合唱祭実行委員会で解決策を話し合わせ、その内容を各クラスへ伝達することを試みた。六つの学年の生徒が縦のアドバイスをしあうことで、特に6年生（高校3年生）が中学生へ解決方法をアドバイスすることは、非常に有益であった。委員会生徒への事後アンケートでも、「先輩方が親身になって相談に乗ってくれたおかげで、クラスをまとめることができた(2年生委員)」「困っているのは自分のクラスだけではないことが分かって心強かった(3年生委員)」といったコメントがあり、少しの時間でも話し合いを活用することで、問題解決につながった。生徒会活動だけでなく、ホームルーム活動や学校行事においても、話し合い活動を活性化させるためには、事前に司会者等の生徒と打合せを行うことが非常に大切であ

る。

(3) 新型コロナウイルス感染症への対応

A 中等教育学校では臨時休業開始後すぐに校長と若手教員を中心に自主的な勉強会・研修会を立ち上げ、当初は利用経験のない通信ソフトである Skype を活用した会議等を行いながら、生徒とコミュニケーションを取る方法を試行錯誤した。そして自宅学習期間開始後いち早く Zoom による同時双方向型のホームルーム（学級活動）を始めた。

コロナ禍で外出もままならない生徒たちに対し、ただ課題を指示するだけでなく、毎朝制服に着替え、画面越しでもクラスメイトの顔を毎日見ることで、生徒たちは生活リズムの維持や心の安定につながったようである。

学習指導要領解説 特別活動編は、「様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して様々に行われる活動の総体」であり、「そこで育まれた資質・能力は、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で生かされていくことになる」という特質を持った領域である。

コロナ禍においても、集団に対する所属感を途切れさせなかったのは、特別活動の視点からも非常に有意義であった。さらに、校内オンライン研修の成果や管理職のリーダーシップもあり、本校では最初の1週間はオンラインホームルームのみであったが、すぐに40分の6時間授業が開始され、実技を含めたすべての教科で同時双方向型の授業を行うことができた。

学校行事も体育祭・文化祭・合唱祭が中止となり生徒たちも悲観していたが、A 中等教育学校では実行委員たちがオンラインで会議を重ね、代替行事である「活動発表会」を実施した。感染症対策を徹底した競技や文化部によるパフォーマンスを実施し、保護者へもライブ配信した。多くの生徒が充実感や満足感から涙しており、このような感動体験は、社会へ出てからも役に立つはずである。

4 教務主任としてのカリキュラムマネジメント

(1) 系統的な宿泊行事

「ホームルーム活動」「生徒会活動」「学校行事」と聞くと、学級（ホームルーム）担任や生活指導部所管と捉えられがちだが、年間授業計画や年間行事計画等の教育課程の編成所管は教務部であり、中高6年間を見据えた系統的な行事等の立案を行っている

A 中等教育学校では6年間を系統立てて、体験的な宿泊行事を盛り込んでいる(図2)。



図2 A 中等教育学校の系統的な校外学習（★は日帰り遠足）

(A 中等教育学校は6年間の校外学習を事前学習・事後学習も含めて体系的に位置付ける。)

このような系統的な学校行事（宿泊行事）を軸に、ここに向かうための事前学習や事後学習を特別活動の年間計画や各学級（ホームルーム）の計画に盛り込み、事前学習・事後学習とも文化祭や総合的な学習（探究）の時間で発表等を行っている。

1・2年生は、農林水産業に触れ、地方を含めた広い視野を育成し、3・4年生は、古代・中世・近世の歴史について学び、5・6年生は、学習の集大成として「海外修学旅行」や海外からの留学生に東京を案内する「東京グローバル遠足」を実施している。

学年や担任によって目的地を変えることなく、学校全体で目的を持って宿泊行事を計画し、毎年ブラッシュアップしていくのも、特別活動の目的に照らすと必要なことである。

(2) 意図的・計画的な学校行事

A 中等教育学校では「思いやり・人間愛をもった社会的リーダー」育成のため、数多くの意図的・計画的な学校行事を行っている。例えば、生徒会の役員選挙は、地域の選挙管理委員会から実際に使われている投票台と投票箱を借用し、放課後に投票所へ向かう自由選挙型を導入した。クラスで強制的に投票を実施するのではなく、自らの意思で投票所に出向き投票するので、投票率も示すことができ、投票率が低い場合は、生徒の選挙管理委員会で対策を検討するなど、本番さながらの雰囲気である。



図3 生徒会の役員選挙の様子
(教室で実施する強制的な投票でなく、放課後に投票所へ向かう自由選挙型を導入した。)

主権者教育は3年生の社会科公民的分野の「模擬選挙」や4年生の学校設定科目「文化科学Ⅱ」などでも扱うが、生徒会の役員選挙をこの形式で行うことで、生徒たちは早い段階で選挙を自分事としてとらえ、社会参画へ向けての一步となっている。

5 まとめ

以上、A 中等教育学校の特別活動における三つの視点を踏まえた実践事例をまとめてきた。特別活動はホームルーム（学級）担任の視点から紹介されることが多いが、特別活動で育む「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の資質・能力については、生活指導部や教務部など多くの校務分掌等が関わるのが極めて重要である。

特別活動は教員免許がないにも関わらず、生徒の成長に不可欠な分野である。多くの成人に聞いても、卒業後に生徒の記憶に残るのは、学校行事や生徒会活動、クラスの仲間との思い出といった、特別活動の内容である。また、近年エジプトなど海外からも日本式教育の「TOKKATSU」が注目されている。しかし実際は、目の前の校務に追われて行事をこなすことで精一杯であり、自身だけの経験論だけで語りがちである。これを解決するには、学校行事や生徒会活動を別の視点で捉え直したり、意欲のある教員からのわずかなアイデア等を具現化したりすることで、よりよい特別活動とすることができる。この特別活動の実践事例が、学級や学校という身近な社会での活動を通じ、子どもたちにより良い人間関係の形成や主体的な社会参画、集団の中での自己実現を促す一助となれば幸いである。

(共同執筆者 高田直人)

選定委員より<この論文の「よさ」について>

- ★特別活動に対する教員の関わり方への警鐘となっている点、見失われがちな教務部の学校行事への関わりの視点の再確認を提示している点。
- ★高等学校における特別活動に対して、教師がねらいを明確に示し意図的・計画的な指導を行うことについて研究を重ねていることが最も意義深いことであると感じます。
- ★中等教育段階における特別活動を6年間を見通して計画を立て、異年齢が関わる実践を通して、話し合いでの教師の関わり方を明確化させるとともに、指導の在り方を示していること。
- ★高校生のもつ、話し合いにおける課題を明確に押さえている点。
- ★特別活動における生徒の実態をアンケート調査等によって分析した上で、「事前打ち合わせシート」を開発して実践している。中等教育学校の特徴を生かし 上級生が下級生のロールモデルとなり、学年間交流が 好循環となるように計画されている。